泉鏡花

茸の舞姫

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

［やぶちゃん注：本篇は大正七（一九一八）年四月発行の『中外』第二巻第五号に初出し、翌大正八年一月に春陽堂から刊行した作品集「友染集」に所収された。

底本は岩波旧全集（巻十八・一九四二年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（私の鏡花の俳句集のこちらのものは、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を、概ね、使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化或いは「々」としたが、その外の表示表記はルビに至るまでそのまま再現してある。なお、本篇では六点と九点のリーダが混在している。

各段落末或いは適切なシークエンスの最後にポイント落ちで注を附した。複数注した箇所もあるので、視認し易くするために、採り上げた語句を太字で示した。**今回のものはかなり私的なマニアックなものとなっている。また、特に本篇の場合、作品内時制の問題が一つの難解性を齎しているのではないかと私は考え（ネット上の本篇の感想に、面白かったが、何となく訳が分からぬ内に読み終わっていた、といったような書き込みが、複数、見出された）、そこにも力を入れて注してある。それに伴って、ロケ地も完全同定が出来た。**目障りな、と言われる方は無視して飛ばせばよい。そのためにポイントを落としたのだから。

なお、**本篇には障碍者に対する差別意識や差別用語、旧被差別民への蔑視的表現が、多く各所に出現する。その部分は批判的視点を忘れずに読まれたい。**

因みに、本テクスト注は、二〇〇六年五月十八日のニフティのブログ・アクセス解析開始以来、本ブログが昨夜午後前に、百七十六万アクセスを突破した記念として公開することとした。【二〇二二年六月十九日　藪野直史】］

茸の舞姫

一

「杢さん、これ、何？……」

と小兒が訊くと、眞赤な鼻の頭を撫でて、

「綺麗な衣服だよう。」

此は又餘りに情ない。町内の杢若どのは、古筵の兩端へ、笹の葉ぐるみ青竹を立てゝ、繩を渡したのに、幾つも蜘蛛の巣を引搦ませて、商賣をはじめた。まじまじと控へた、が、然うした鼻の頭の赤いのだからこそ可けれ、嘴の黑い烏だと、其まゝの流灌頂。で、お宗旨違の神社の境内、額の古びた木の鳥居の傍に、裕福な仕舞家の土藏の羽目板を背後にして、秋の祭禮に、日南に店を出して居る。［やぶちゃん注：**「流灌頂」**通常は「ながれくわんぢやう」と濁る。仏語で、灌頂（サンスクリット語の「アビシェーカ」又は「アビシェーチャナ」の漢音写。大乘仏教に於いて仏の五智を象徴する水を頭頂に注いで、悟りの位に達したことを証する儀式を指す。後に師が弟子に対して行い、仏位の継承を示す重要な儀式となった。元来はインドで国王の即位や立太子に際して行われたものが起源）の幡又は塔婆を、川や海に流して功徳を回向する法会。特に、水死者や、難産で死んだ婦人、或いは、無縁仏などの供養のために行なわれるが、元来は、魚類などの水界の生き物を済度するために行なった施餓鬼会の一種である。ここはその施餓鬼会の祭壇を、私の「小泉八雲　海のほとりにて　（大谷正信訳）」に挿入された、小泉八雲が原画を描き、後に友人に補正して貰った“THE FEAST OF THE GHOSTS”（「霊たちの餐・霊たちへの馳走」）とキャプションする絵で見られたい。さすれば、この「杢さん」の「青竹を立てゝ、繩を渡した」店開き、そこで売られる「幾つも蜘蛛の巣を引搦ませ」た「衣服」という初っ端から見せるぶっ飛んだ奇体なさまが、恰も「流灌頂」の祭壇に如きに似るという洒落（その供物を狙って襲う鴉を否定的に反転させた隠喩としているのは恐るべきメタファーである）がお判り戴けるであろう。］

賣るのであらう、商人と一所に、のほんと構へて、晴れた空の、薄い雲を見て居るのだから。

飴は、今でも埋火に鍋を掛けて暖めながら、飴ん棒と云ふ麻殻の軸に卷いて賣る、賑かな祭禮でも、寂びたものゝ、お市、豆捻、薄荷糖なぞは、お婆さんが白髪に手拭を卷いて商ふ。何でも買ひなの小父さんは、紺の筒袖を突張らかして懐手の默然たるのみ。景氣の好いのは、蜜垂ぢや蜜垂ぢやと、菖蒲團子の附燒を、はたはたと煽いで呼ばるゝ。……毎年顔も店も馴染の連中、場末から出る際商人。丹波鬼灯、海酸漿は手水鉢の傍、大きな百日紅の樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、氣まぐれに山から出て來た、もの賣で。――［やぶちゃん注：**「お市」**「御市」で「お」は接頭語。落雁に似た駄菓子の一種。**「豆捻」**砂糖を煮て捩じった短い棒飴の一種。製法が当該ウィキペディアに書かれてある。「菖蒲團子の附燒」先を四つに裂いた竹の一つ一つに小さく平たい団子を刺し、アヤメの花に模ったものに、ここでは砂糖醤油をかけて燒いたもの。］

賣るのは果もの類。桃は遲い。小さな梨、粒林檎、栗は生のまゝ……うでたのは、甘藷とゝもに店が違ふ……。奥州邊とは事かはつて、加越のあの邊に朱實は殆どない。こゝに林の如く賣るものは、黑く紫な山葡萄、黄と青の山茱萸を、蔓のまゝ、枝のまゝ、其の甘澁くて、且つ酸き事、狸が咽せて、兎が醉ひさうな珍味である。

此のおなじ店が、筵三枚、三軒ぶり。笠被た女が二人並んで、片端に頰被りした馬士のやうな親仁が一人。で、一方の端の所に、件の杢若が、繩に蜘蛛の巣を懸けて罷出た。

「これ、何なにさあ。」

「美しい衣服ぢやが買はんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳に成る……杢の年紀が分らない。小兒の時から大人のやうで、大人になつても小兒に齊しい。彼は、元來、此の町に、立派な玄關を磨いた醫師のうちの、書生兼小使、と云ふが、それほどの用には立つまい、たゞ大食ひの食客。［やぶちゃん注：**「此の町」**ここに至って、先の「加越のあの邊」と相俟って「此の町」が鏡花の故郷金沢を含む旧加賀藩内であろうことが、ほぼ判然とする。但し、加賀藩には他に越中富山藩及び加賀大聖寺藩があったが、後の第「六」章で、これを現在の金沢市内相当と限定断定出来る地理的要素が出現するので間違いない。］

世間體にも、容體にも、痩せても袴とある處を、毎々薄汚れた縞の前垂を〆めて居たのは食溢しが激しいからで――此の頃は人も死に、邸も他のものに成つた。其の醫師と云

ふのは、町内の小兒の記憶に、もう可なりの年輩だつたが、色の白い、指の細く美しい人で、ひどく權高な、其の癖婦のやうに、口を利くのが優しかつた。……細君は、赭ら顔、横ぶとりの肩の廣い大圓髷。眦が下つて、脂ぎつた頰へ、恁う……何時でもばらばらとおくれ毛を下げて居た。下婢から成上つたとも言ふし、妾を直したのだとも云ふ。實の御新造は、人づきあひは固よりの事、門、背戸へ姿を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まつた處に籠切りの、長年の狂女であつた。――で、赤鼻は、章魚とも河童ともつかぬ御難なのだから、待遇も態度も、河原の砂から拾つて來たやうな體であつたが、實は前妻の其の狂女がまうけた、實子で、然も長男で、此の生れたて變なのが、やゝ育つてからも變なため、其を氣にして氣が狂つた、御新造は、以前、國家老の娘とか、それは美しい人であつたと言いふ……［やぶちゃん注：**「下婢」**「御三・御爨」の当て字。「お」は軽い人称敬称を添える接頭語で、腰元や台所で働く下女の通称。おさんどん。上方言葉では元祿（一六八八年～一七〇四年）以降、また、江戸言葉では明和（一七六四年～一七七二年）以降に用例が見える。そこから、上方から江戸へ入った語と思われるが、元々は下女だけでなく、腰元をも指す通名であった。近世末期頃の上方では、寧ろ、「おきよ（どん）」という言い方が普通で、「おさん（どん）」は専ら江戸で、しかも下女の意味に限定して用いられる言い方になっていたことが窺える。仲間内では「おさんどん」、主人からは単に「さん」と呼ばれることが多い（ここまでは主文を小学館「日本国語大辞典」に拠った）。語源には諸説あるが、一般的には江戸時代、「三」とは「三女」の意を指し、女性の名にそのまま使われることの多かった「さん」という名前に、接頭辞の「御」と、人を呼ぶ際に使われる接尾辞「どん」（「殿」の音変化。対象者への軽い敬愛の気持ちを表わす。概ね商家などに於いて同輩又は目上の人が奉公人を呼ぶ際などに多く用いる。但し、九州南部では一般人称敬称としても用いる）が付いて、「御三どん」と呼ばれるようになった。他に、古く大奥の奥にある下女のいる「御三の間」に因むとも、竈を意味する「爨」（音「サン」）で「御爨」に掛けた言葉とする説などがある（以上は主文をウィキの「おさんどん」に拠った）。但し、日本海側の富山までの北陸地方は関西方言圏・文化圏であるから、金沢が舞台だと、やや違和感のある言い方ではあると私は感ずる。**「國家老」**以下、全くの私事であるが、怪談嗜好の強い読者は、是非、読んで貰いたい。小生の先祖笠井家（父母は従兄妹で、私は藪野家よりもそちらの血が濃いことになる）は加賀藩家老であった。絵図にも屋敷が示されてある。しかし、後代の子孫の当主が咎めを受け、国元を追放され、浪々の果て、最後は中部地方の、朝顔の咲いている野面で狂乱し、切腹し果てたと伝える。そのため、笠井家では、代々、朝顔を忌んで庭に植えない。亡き母も植えなかった。以上は今まで親しい友人や教え子にも喋ったことのない、私の祖先の黒歴史である。また、私は中高の六年間を旧加賀藩領であった富山県高岡市伏木で

過ごした。されば、この小説には妙に異様に惹かれるものが個人的にはあると言えるのである。次いでに言っておくと、私の祖父笠井直一は歯科医であったが、若き日に金沢の連隊に勤務していたが、そこで首だけの女の亡霊に遭遇している。私の擬古文体怪奇談集「淵藪志異」の「二」がそれである。これはメディアファクトリーの一九九九年十一月号の『ダ・ヴィンチ』に一ページ割り当てで載り、京極夏彦・東雅夫・木原浩勝・中山一朗諸氏の好評を得、彼らの組織した『怪談之怪』の会員にもなった。この一篇は、後、同社から二〇〇六年に刊行された上記四氏の編になる「怪談の学校」にも再録されてある。かく、私自身にとって加越の風土は、精神の伝承的遺伝子、或いは、青春期の諸々の苦甘い記憶の中に刻印されてあった永遠に「怪しい」場所なのであり、若くに鏡花に惹かれた一因もそこにあると言えるのである。」

或秋の半ば、夕より、大雷雨のあとが暴風雨に成つた、夜の四つ時十時過ぎと思ふ頃、凄じい電光の中を、蜩が鳴くやうな、うらさみしい、冴えた、透る、女の聲で、キイキイと笑ふのが、恰かも樹の上、雲の中を傳ふやうに大空に高く響いて、此の町を二三度、四五度、風に吹廻されて往來した事がある……通魔がすると恐れて、老若、呼吸をひそめたが、あとで聞くと、其の晩、齋木（醫師の姓）の御新造が家を拔出し、町内を彷徨つて、疲れ果てた身體を、社の鳥居の柱に、黒髪を颯と亂した衣は鱗の、膚の雪の、電光に眞蒼をなのが、瀧をなす雨に打たれつゝ、怪しき魚のやうに身震して跳ねたのを、追手が見つけて、醫師の其の家へかつぎ込んだ。間もなく柩と云ふ四方張の俎に載せて燒かれて了つた。齋木の御新造は、人魚に成つた、あの暴風雨は、北海の濱から、潮が迎ひに來たのだと言つた――［やぶちゃん注：**「衣は鱗の」**以下の部分を読んでいると、妙に「鱗」に「魚」に「人魚」に「俎」、「北海の浜」からの「潮の迎え」という表現の畳みかけた絡みが異様に気になってくる。気になると、捨て置けぬのが私の性分で、考えた。――この杢さんの実母は、或いは、重い後天性の魚鱗癬（ichthyosis：イクスィオウスィス：体の表皮が魚の鱗のように硬くなり、剥がれ落ちる疾患。古代ギリシア語「イクテューオ」（「魚の」）」と「状態」を表わす語を作るギリシア語接尾辞「オーシース」を繋げた合成語。「魚状の病態」が原義）だったのではないか？という気がしてくる。それに加えて、息子の知的障碍が重いものであったことにショックを受け、引き籠り、強い抑鬱状態となり、魚鱗癬の症状も増悪し、強迫神経症或いは統合失調症に進んだものかも知れぬと私は感じた。］

其の翌月、急病で齋木國手が亡く成つた。あとは散々である。代診を養子に取立ててゝあつたのが、成上りの其の肥満女と、家藏を賣つて行方知しれず、……下男下女、藥局の輩まで。勝手に摑み取りの、梟に枯葉で散り散ばらばら。……藥臭い寂しい邸は、

冬の日賣家の札が貼られた。寂とした暮方、……空地の水溜を町の用心水にしてある掃溜の芥棄場に、枯れた柳の夕霜に、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提灯の如くぶら下げて立つて居たのは、屋根から落ちたか、杢若どの。……親は子に、杢介とも杢藏とも名づけはしない。待て、御典醫であつた、彼のお祖父さんが選んだので、本名は杢之丞ださうである。

――時に、木の鳥居へ引返さう。［やぶちゃん注：**「鼻に枯葉」**鼻の一種は羽根の色の組み合わせが枯葉などに紛れ込む保護色を呈するから、少しでも使えそうな金めの物は、一切合財、持ち去られて、「何がどこにあった判らぬ」までに、何もかも持ち去られたという謂いか。**「屋根から落ちた」**後の杢さんの失踪及び帰還後の奇怪な噂への伏線。**「國手」**「国を医する名手」の意。名医或いは医師を敬っていう語。］

二

こゝに、杢若が其の怪しげなる蜘蛛の巣を擴げて居る、此の鳥居の向うの隅、以前醫師の邸の裏門のあつた處に、むかし番太郎と言つて、町内の走り使人、齋、非時の振廻り、香奠がへしの配歩行き、秋の夜番、冬は雪掻の手傳ひなどした親仁が住んだ……半ば立腐りの長屋建て、掘立小屋と云ふ體なのが一棟ある。［やぶちゃん注：**「番太郎」**「番太」とも。江戸時代、町村に雇われた見張り番の愛称。職務は、町によっては、四つ辻などにある番小屋の木戸番、あるいは火の番や夜番、村によっては、山野水門の警備や、ここに出るような各種の使い走りから、夜警や、浮浪者の取締りなども行った。僅かな番人給が支給されていたが、昼間は草鞋・膏薬・駄菓子などを売る内職をしていた。さて、ここでそれを「むかし」と言っている点、その番小屋が立ち腐っているというところからは、これは幕末以降、明治のごく初期辺りまでを作品内時制の閉区間としていると措定してよいかと、嘗つて若き日に読んだ時は、この箇所で思ったのを記憶している。しかし、全体に心内で映像化する時は近世後末期が概ね相応しいのだが、一方、しかし、子らの遊び言葉に、花火の打ち上げとか、いかにも子供向けに売られている花火の名称染みた「流星」という語が出るに至っては、明治に入ってからとしか考えられぬ、と躊躇もしたものだった。結局、その当時、私は、あくまで鏡花的幻想世界の架空の、近世から現代（現在の近代）の境界的時空間、或いは「逢魔が時」的パラレル・ワールドという暈した括りにしておく方がよく、さすれば、想起される映像も、脳内に勝手に造形して全く問題がないと私は思い込むことにしたことを述べておく。而して、今回、それを検証したのだが、私の許容想定は概ね正しかったことを、今回、以下で証明した。但し、鏡花が基本的に行った時代設定は、やはり江戸末期であると断言出来る。その根拠は後の第「六」章での注を参照されたい。

「齋、非時の振廻り」本来は僧侶に許された午前中の一度だけの食事と、それでは実際には身が持たないので、「非時」と称して午後以降にする食事を限定する語であるが、ここは、単に町の人々への朝餉時・昼飯時・夕餉時の触れ廻りをすることであろう。]

町中が、杢若を其處へ入れて、役に立た立たないは話の外で、寄合持で、雑と扶持をして置くのであつた。

「杢さん、何處から仕入れて來たよ。」

「縁の下か、廂合かな。」

其の蜘蛛の巣を見て、通掛りのものが、苦笑ひしながら、聲を懸けると、……

「違ひます。」

と鼻ぐるみ頭を掉つて、

「、、、さとからぢや、はゝん。」と、ぽんと鼻を鳴らすやうな咳拂をする。此奴が取澄まして如何にも高慢で、且つ翁寂びる。爭はれぬのは、お祖父さんの御典醫から、父典養に相傳して、脈を取つて、ト小指を刎ねた時の容體と少しも變らぬ。[やぶちゃん注：**「廂合」**は「廂間」(ひあはひ(ひあわい))で、建て込んだ家の廂と廂とが突き出ている狭い所。日の当たらない所の意。**「容體」**様子。仕草。]

杢若が、、、さとと云ふのは、山、村里の其の里の意味でない。註をすれば里よりは山の義で、字に顯はせば故郷に成る……實家に成る。

八九年前晩春の頃、同じ此の境内で、小兒が集つて凧を揚げて遊んで居た——杢若は顱の大きい坊主頭で、誰よりも群を抜いて、のほんと脊が高いのに、その揚げる凧は絲を惜んで、一番低く、山の上、松の空、桐の梢とある中に、僅かに百日紅の枝とすれすれな所を舞つた。

大風來い、大風來い。

小風は、可厭、可厭……

幼い同士が威勢よく唄ふ中に、杢若は唯一人、寒さうな懐手、絲卷を懐中に差込んだまゝ、此の唄にはむずむずと襟を摺つて、頭を掉つて、そして面打つて舞ふ己が凧に、合點々々をして見せて居た。

……にも係らず、烏が騒ぐ逢魔が時、颯と下した風も無いのに、杢若の其の低い凧が、

懐の絲卷をくるりと空に卷くと、キリキリと絲を張つて、一ツ星に颯と外れた。
「魔が來たよう。」
「天狗が取つたあ。」
ワツと怯えて、小兒たちの逃散る中を、團栗の轉がるやうに杢若は黑くなつて、凧の影を何處までも追掛けた、其の時から、行方知れず。
五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの凧を提げて、矢張り鳥居際に茫乎と立つて居た。天狗に攫はれたと言ふ事である。
それから時々、三日、五日、多い時は半月ぐらゐ、月に一度、或は三月に二度ほどづゝ、人間界に居なく成るのが例年で、いつか、其のあはれな母の然うした時も、杢若は町には居なかつたのであつた。
「何處へ行つてござつたの。」
町の老人が問ふのに答へて、
「實家へだよう。」
と、それ言ふのである。此の町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰續きさう分入るに相違ない、魔の棲むのは其處だと言ふから。
「お實家は何處ぢや。何う云ふ人が居さつしやる。」
「實家の事かねえ、はゝん。」
スボンと栓を拔く、件の咳を一つすると、これと同時に、鼻が尖り、眉が引釣り、額の皺が縊れるかと凹むや、眼が光る。……齒が鳴り、舌が滑に赤くなつて、滔々として辨舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩らす――これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母も、其の兒、孫などには決して話さなかつた。
幼いものが、生意氣に直接に打撞る事がある。
「杢やい、實家は何處だ。」
「實家の事かい、はゝん。」
や、もう其の咳で、小父さんのお醫師さんの、膚觸りの柔かい、冷りとした手で、脈所をぎうと握られたほど、悚然とするのに、忽ち鼻が尖り、眉が逆立ち、額の皺が、ぴりぴりと蠢いて眼が血走る。……

聞く所か、これに怯えて、ワツと遁げる。

「實家はな。」

と背後から、蔽はれかゝつて、小兒の目には小山の如く追つて來る。

「御免なさい。」

「きやつ！」

其の時に限つては、杢若の耳が且つ動くと言ふ――嘘を吐け。［やぶちゃん注：**「小父さんのお醫師さんの、膚觸りの柔かい、冷りとした手で、脈所をぎうと握られたほど、悚然とする」**この比喩表現は、一種、病的であるが、卓抜である。が、故に、読者の中には思わず意味を採るに途惑う方もあるであろう。まず、この比喩は杢さんの父の医師とは全く無関係である（遠い昔、初読時、その関係を考えて、私自身が躓いたことを告白する）。要するに、恰も、「中年の男の医者の、その触診する手が、これ妙に肌触りが柔らかく、それでいて、普通の人より冷たいそれで、その手が、手首辺りの血管を脈拍を計ろうとして、ふいにぎゅッと握られた時のように」、「ぞっとする」という迂遠なシミリなのである。さて、鏡花がかなり強烈な、殆んど病的と言ってよいほどの潔癖症であったことは、非常によく知られている。彼は、完全に熱を通したものしか、口にしなかった。酒も沸騰するほどに燗をしたものしか飲まず、鍋物などもぐたぐたに煮込んだし、畳には手の甲でしか触れず、煙管の吸い口には筒状の使い捨てのキャップ様のジョイントを挿入していた等々、枚挙に遑がない。これは明治三八（一九〇五）年に赤痢に罹患し、予後、長く胃腸が慢性的に弱ったトラウマが元とされるが（この時に逗子に転地療養しており、そこが「春晝」「春晝後刻」の名篇を生む舞台となったのであった）、多分にアプリオリな気質癖でもあったように思われる。私の遠い親族にも嘗つてそうした女性がいた。非常に顔立ちの美しい、その土地では、彼女の住まいを「〇〇御殿」と呼ぶほどの著名な裕福な方だったが、常に金属製のアルコールを浸したガーゼを入れた医療用指頭消毒器を持ち歩き、貨幣は勿論、電車の吊革や、書店の本に触れても、必ず手を拭っておられた。そこから容易に想像出来ると思うが、彼女は病院や医師を最も忌避していた。患者と接するからには、その医師に触れられるということは、一般の日常的対象者以上に何らかの汚損物質や病原体による感染リスクが高いと考えていたからである。さて。このちょっと異様な感じの長い鏡花に譬喩には、私の親族同様、彼のそうした強迫神経症としての汚染（不潔）恐怖症（mysophobia：マイソウフォウビア：ギリシャ語「ミューソス」（「汚れた」））がその根底にあることは、最早、間違いない。これは私は関係妄想による精神的に追い立てられてゆく一種の追跡妄想の変形的寓話的表現とも思われ、鏡花作品には随所にそれと思われる叙述や表現を有意に見出せるのである。但し、逆にその反動として、本篇でも以下で見られるように、一般読者の有意な人々にかなり激しい生理的嫌悪感を抱かせるようなシークエンスを、殊更にリアルにこれでもかというほど緻密にオノマトペイアもふんだん

に描き出す確信犯の偏執的嗜好も、彼には目立って大いにあり（実は私にもその傾向がある。高校教師時代、脱線してその手の話をすると、一部の女生徒からは露骨に嫌われたものであった）、この強いアンビバレンツは病跡学的にも非常に興味深いものであると言える。]

三

海また湖へ、信心の投網を颯と打つて、水に光るもの、輝くものゝ、佛像、名劍を得たと言つても、賣れない前には、其の日一日の日當が何うなつた、米は兩につき三升、と云ふのだから、此の如き杢若が番太郎小屋に唯ぼうとして活きて居るだけでは、世の中が納まらぬ。[やぶちゃん注：「米は兩につき三升」幕末には強烈なインフレが起こり、例えば慶応年間（一八六五年～一八六七年）の江戸では米一升が五百文から一千文（一両は公定相場四千文）にまで高騰した。]

入費は、町中持合とした所で、半ば白癡で――たとひ其が、實家と言ふ時、魔の魂が入替るとは言へ――半ば狂人であるものを、肝心火の元の用心は何とする。……炭團、埋火、榾、柴を焚いて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、杢若は切凧の一件で、山に實家を持つて以來、未だ嘗て火食をしない。多くは果物を餌とする。松葉を嚙めば、椎なんぞ葉までも頰張る。瓜の皮、西瓜の種も差支へぬ。桃、栗、柿、大得意で、烏や鳶は、むしやむしやと裂いて鱠だし、蝸牛蟲やなめくぢは刺身に扱ふ。春は若草、薺、茅花、つくつくしのお精進……蕪を嚙る。牛蒡、人參は縱に啣へる。[やぶちゃん注：**「茅花」**単子葉植物綱イネ目イネ科チガヤ属チガヤ *Imperata cylindrica* の異名。本種の根は「シバの根」「甘根」などと称し、噛むと甘い味がする。私の『「萩原朔太郎詩集　Ⅴ　遺稿詩集」（小学館版）「第一（「愛憐詩篇」時代）」　春日』の「柴草」の注を参照されたい。]

此の、秋は又いつも、食通大得意、と云ふものは、木の實時なり、實り頃、實家の土産の雉、山鳥、小雀、山雀、四十雀、色どりの色羽を、ばらばらと辻に撒き、廂に散らす。但、魚類に至つては、金魚も目高かも決して食はぬ。[やぶちゃん注：最後は言わずと知れた、母が人魚となったと信じているからである。]

最も得意なのは、も一つ茸で、名も知らぬ、可恐ろしい、故郷の峰谷の、蓬々しい名の無い菌らも、皮づゝみの餡ころ餅ぼたぼたと零すが如く、袂に襟に溢れさして、

山野の珍味に厭き給へる殿様が、此にばかりは、露のやうなよだれを垂し、
「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味ぞのッ。」は凄じい。
が、恁く菌を嗜む所爲だらうと人は言つた、まだ杢若に不思議なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、陰では、汚れたどろどろの衣の縞目も判明する。……委しく言へば、晝は影法師に肖て居て、夜は明かなのであつた。
却説、店を並べた、山茱萸、山葡萄の如きは、此の老舗には餘り資本が掛らな過て、恐らくお錢に成るまいと考へたらしい。で、精一杯に賣るものは。
「何だい、こりや！」
「美しい衣服ぢやがい。」
氏子は呆れもしない顔して、これは買ひもせず、貰ひもしないで、隣の木の實に小遣を出して、枝を蔓を提げるのを、じろじろと流眄して、世に伯樂なし矣、とソレ青天井を向いて、えへらえへらと嘲笑ふ……［やぶちゃん注：**「世に伯樂なし矣」**知られた韓愈の「雜說四首」のそれを捩ったものだが、「世有伯樂、然後有千里馬。千里馬常有、而伯樂不常有。」が原文で、しかもこの文字列自体も、これに類する言及部での断定の助字としての「矣」の字の使用はない。謂いは、「馬鹿につける薬はない」的な用法で名馬の調教師伯楽を出すこと自体が、話としてはズレが生じていておかしく（相手が「馬鹿」であるから「馬」に通ずると洒落たものかとは思う）、しかも「矣」は漢文では、この用法では読まないのが約束であるから、ここはその氏子が半可通で整合性のない換喩を、さも漢文から引用した如く「矣」を添えることで、半可通のいやらしさを出したものであろう。］
其の笑が、日南に居て、蜘蛛の巣の影になるから、鳥が嘴を開けたか、猫が欠伸をしたやうに、人間離れをして、笑ひの意味を爲さないで、ぼくりと成る……
と言ふもので、筵を並べて、笠を被つて坐つた、山茱萸、山葡萄の婦どもが、件のぼやけさ加減に何となく誘はれて、此の姿も、又何うやら太陽の色に朧々として見える。
蒼い空、薄雲よ。
人の形が、然うした霧の裡に薄いと、可怪や、掠れて、明さまには見えない筈の、扱いて搦めた縺れ絲の、蜘蛛の圍の幻影が、幻影が。
眞綿をスイと繰つたほどに判然と見えるのに、薄紅の、淺葱の蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金絲銀絲や消え際の草葉螟蛉、金龜蟲、蠅の、蒼蠅、赤蠅。

羽ばかり秋の蟬、蜩の身の經帷子、いろいろの蟲の死骸ながら巣を引拐つて來たらしい。それ等が艶々と色に出る。

あれ見よ、其の蜘蛛の圍に、ちらちらと水銀の散つた玉のやうな露がきらめく……

此の空の晴れたのに。――［やぶちゃん注：**「露」**不思議なそれは、以下の次章の冒頭口上通りの次章への伏線である。］

四

これには仔細がある。

神の氏子の此の數々の町に、やがて、あやかしのあらうとてか――其の年、秋の此の祭禮に限つて、見馴れない商人が、妙な、異つたものを賣つた。

宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立つた、白い幟の下に店を出して、其處に鬻ぐは何等のものぞ。

河豚の皮の水鐵砲。

蘆の軸に、黑斑の皮を小袋に卷いたのを、握つて離す、と、スポイト仕掛けで、衝と水が迸る。［やぶちゃん注：**「スポイト仕掛けで」**は鏡花が読者向けに判り易く説明した箇所であり、「スポイト」が出るから本篇内時制を明治初期とする根拠にはならない。］

鰒は多し、又壯に膳に上す國で、魚市は言ふにも及ばず、市内到る處の魚屋の店に、春と成ると、此の怪しい魚を鬻がない處はない。

が、をかしな賣方、一頭一頭を、あの鰭の黄ばんだ、黑斑なのを、ずぼんと裏返しに、どろりと脂切つて、ぬらぬらと白い腹を仰向けて並べて置く。

もし唯二つ並ばうものなら、切落して生々しい女の乳房だ。……然も眞中に、ヅキリと庖丁目を入れた處が、パクリと赤黑い口を開いて、西施の腹の裂目を曝す……

中から、ずるずると引出した、長々とある百腸を、卷かして、束ねて、ぬるぬると重ねて、白腸、黄腸と稱へて賣る。……剩へ、目の赤い親仁や、襤褸半纏の漢等、俗に――穢太と云ふ腸拾ひが、出刃庖丁を斜に構へて、此の腸を切賣する。［やぶちゃん注：**「百腸」**は「百尋」のリアルな当て字。「尋」は水深や縄などの長さの単位で一尋は六尺で約一・八メートルで、非常に長いと

ころから一部の動物の長大な腸、「はらわた」を指す。古くからクジラやマンボウのそれが珍味として食された。先般、前者は以前から私の好物であるが、後者は先日、馴染みの伊東の寿司屋で初めて食すことが出来た。歯応えがあり、臭みなどは皆無で、とても美味かった。マンボウのそれが好まれた事実は、『栗本丹洲自筆「翻車考」藪野直史電子化注(2)』で、神田玄泉の「日東魚譜」(最も古い伝本は享保九(一七一九)年)の惨酷にも浮上している生きているマンボウからそれを採る図が載るほどであったことからも判る。**「穢太」**近世まであった賤民として差別された「穢多」。

「出刃」の「刃」は底本では異体字のこれ(「グリフウィキ」)であるが、表字出来ないのでそれに代えた。」

待て、我が食通の如きは、これに較ぶれば處女の膳であらう。

要するに、市、町の人は、擧つて、手足のない、女の白い胴中を筒切にして食ふらしい。

其の皮の水鐵砲。小兒は爭つて買競つて、手の腥いのを厭ひなく、參詣群集の隙を見ては、シユツ。

「打上げ!」

「流星!」

と花火に擬て、縱横や十文字。

いや、隙どころか、件の杢若をば侮つて、其の蜘味の巣の店を打つた。

白玉の露はこれである。

其の露の鏤むばかり、蜘蛛の圍に色籠めて、いで膚寒き夕と成んぬ。山から颪す風一陣。

はや篝火の夜にこそ。

五

笛も、太鼓も音を絶えて、唯御手洗の水の音。寂として其の夜更け行く。此の宮の境内に、階の方から、カタンカタン、三ツ四ツ七ツ足駄の齒の高響。

脊丈のほども惟はるゝ、あの百日紅の樹の枝に、眞黑な立烏帽子、鈍色に黄を交へた練衣に、水色のさしぬきした神官の姿一體。社殿の雪洞も早や影の屆かぬ、暗夜の中に顯れたのが、やゝ屈みなりに腰を捻つて、其の百日紅の梢を覗いた、霧に朦朧と火が映つて、ほんのりと薄紅の射したのは、其處に焚落した篝火の殘餘である。

此の明で、白い襟、烏帽子の紐の縹花なのがほのかに見える。澁紙した顔に黒痘痕、塵を飛ばしたやうで、尖がつた目の光、髪はげ、眉薄く、頬骨の張つた、其の顔容を見ないでも、夜露ばかり雨のないのに、其の高足駄の音で分る、本田攝理と申す、此の宮の社司で……草履高足駄の他は、下駄を穿かないお神官。［やぶちゃん注：**「縹花」**縹色＝花色のこと。恐らくは鏡花の漢字表記を変えた造字。古くから知られた藍染めの色名で、藍色よりも薄く、浅葱色よりも濃い青系の色を指す。古くは「はなだいろ」、平安時代は「縹色」、江戸時代は「花色」と色名を変えて伝わってきた。参考にしたサイト「伝統色のいろは」の同色のページで色を確認されたい。**「澁紙した顔」**ここは顔の皮膚の色を言ったもの。渋紙のようなくすんだ赤茶色。］

小兒が社殿に遊ぶ時、摺違つて通つても、じろりと一睨みをくれるばかり。威あつて容易く口を利きかぬ。それを可恐くは思はぬが、此の社司の一子に、時丸と云ふのがあつて、おなじ惡戯盛であるから、或時、大勢が軍ごつこの、番に當つて、一子時丸が馬に成つた、叱！　騎つた奴がある。……で、廻廊を這つた。

大喝一聲、太鼓の皮の裂けた音して、

「無禮もの！」

社務所を虎の如く猛然として顯はれたのは攝理の大人で。［やぶちゃん注：**「大人」**学者・師匠或いは領主・主人・貴人の尊称。古くからあり、語源説も多数あるが、私にはどうもピンとくるものはない。］

「動！」と喚くと、一子時丸の襟首を、長袖のまゝ引摑み、壇を倒に引落し、ずるずると廣前を、石の大鉢の許に摑み去つて、いきなり衣帶を剝いで裸にすると、天窓から柄杓で浴びせた。［やぶちゃん注：**「動！」**馬を制する時の感動詞「どう」の当て字。ここは四つん這いになって馬を演じているところだから、確信犯の鏡花のお遊びである。］

「鹽を持て、鹽を持て。」

鹽どころぢやない、百日紅の樹を前にした、社務所と別な住居から、よちよち、臀を横に振つて、肥つた色白な大圓髷が、夢中で駈けて來て、一子の水垢離を留めようとして、身を楯に逸るのを、仰向けに、ドンと蹴倒いて、

「汚れものが、退り居れ。――鹽を持て、鹽を持てい。」

いや、小兒等は一すくみ。［やぶちゃん注：**「臀」**座る場所を差す上代語からの語「居敷き」に基づく、近世語で「尻」のこと。**「汚れものが、退り居れ」**は時丸少年を救おうと止めに入った社務所の下級神官に対する罵詈

雑言である。近世まで、大社では、境内や御幸路の死穢の清掃などに従事した最下級の神官に犬神人がおり、彼らは、時に被差別民の中から雇われていた。この人物も、或いは、そうした者であったからかく罵倒されたのではなかったかと私は思っている。]

あの顔一目で縮み上る……

が、大人に道徳と云ふはそぐはぬ。博學深識の從七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。[やぶちゃん注:**「從七位」**と殊更に畳みかけている言うところは、本篇内時制を明治初期とする設定では頗る不都合という気がしてくる。]

「火を、ようしめせよ、燠が散るぞよ。」[やぶちゃん注:「しめせよ」「濕せよ」。ここでは灯火を消すこと。]

と烏帽子を下向けに、其の住居へ聲を懸けて、樹の下を出しなの時、

「雨は何うぢや……些と曇つたぞ。」と、密と、袖を捲きながら、紅白の旗のひらひらする、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れては成らぬが、降りもせまいかな。」

と半ば呟き呟き、颯と卷袖の笏を上げつゝ、唯恁、石の鳥居の彼方なる、高帆柱の如旗棹の空を仰ぎながら、カタリカタリと足駄を踏んで、斜めに木の鳥居に近づくと、呀！鼻の提灯、眞赤な猿の面、飴屋一軒、犬も居らぬに、杢若が明かに店を張つて、暗がりに、のほんとして居る。

馬鹿が拍手を拍つた。

「御前様。」

「杢か。」

「ひゝゝひゝ。」

「何をして居る。」

「少しも賣れませんわい。」

「馬鹿が。」

と夜陰に、一つ洞穴を拔けるやうな乾びた聲の大音で、

「何を賣るや。」

「美しい衣服だがなう。」

「何？」

暗やみを見透かすやうにすると、ものゝ靜かさ、松の香が芬とする。

六

鼠色の石持、黑い袴を穿いた宮奴が、百日紅の下に影の如く踞まつて、びしやツびしやツと、手桶を片手に、箒で水を打つのが見える、と……其處へ――［やぶちゃん注：**「石持」**衣で定紋を描くべき部分を丸く白抜きにして染め上げたもの。必要に応じ、任意の紋をその中に上絵して用いる。］

あれあれ何ぢや、ばゞばゞばゞ、と赤く、かなで書いた字が宙に出て、白い四角な燈が通る、三個の人影、六本の草鞋の脚。

燈一つに附着合つて、スツと鳥居を潛つて來たのは、三人齊しく山伏也。白衣に白布の顱卷したが、面こそは異形なれ。丹塗の天狗に、綠青色の般若と、面白く鼻の黃なる狐である。魔とも、妖怪變化とも、もし此れが通魔なら、あの火をしめす宮奴が氣絶をしないで堪へるものか。で、般若は、一挺の斧を提げ、天狗は注連結ひたる半弓に矢を取添へ、狐は腰に一口の太刀を佩く。

中に荒繩の太いので、笈摺めかいて、灯した角行燈を荷になつたのは天狗である。が、これは、勇しき男の獅子舞、媚かしき女の祇園囃子などに齊しく、特に夜に入つて練歩行く、祭の催物の一つで、意味は分らぬ、（やしこばゞ）と稱ふる若連中のすさみである。それ、腰にさげ、帶にさした、法螺の貝と横笛に拍子を合せて、

やしこばゞ、うばゞ、
うば、うば、うばゞ。
火を一つ貸せや、
火はまだ打たぬ。
あれ、あの山に、火ひが一つ見えるぞ。
やしこばゞ、うばゞ、
うば、うば、うばゞ。

……と唄ふ、たゞそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞はし、太刀をかざして、

頤から頭なりに、首を一つぐるりと振つて、交る交るに緩く舞ふ。舞果てると鼻の尖に指を立てて、臨兵闘者云々と九字を切る。一體、惡魔を拂ふ趣意だと云ふが、何うやら夜陰の此の業體は、魑魅魍魎の類を、呼出し招き寄せるに髣髴として、實は、希有に、怪しく不氣味なものである。［やぶちゃん注：**「すさみ」**「荒み」「進み」「遊み」などと表記し、「慰みごと・気慰めのためにする仕儀・遊び」のことである。「すさび」とも言う。**「やしこばゞ」**「彌三郎婆」の一パターンである「彌彦婆」転訛したものと思われる。北陸地方に広く伝わる人肉を食う鬼女の名で、さまざまな伝承がある。個人サイトと思われる「日本伝承大鑑」の「婆々杉」がそれらをコンパクトによく纏めてあるので、初心者にはこちらがよい。学術的に踏み込んだもので、伝承全体を俯瞰しつつ、しかも読み易いのは、高橋郁子著「ヤサブロバサをめぐる一考察」である（最後に二〇〇三年十月五日の『日本民俗学会』第五十五回年会ポスターセッション参加発表とある）。私のものでは、『柳田國男　山島民譚集　原文・訓読・附オリジナル注「河童駒引」（6）　「羅城門」』の「海を越えて佐渡島に行けば、此の話は忽ち變じて駄栗毛左京の武勇談となりて傳へらる……」の注で、この「弥三郎婆」をとり上げて注しているので、それも参照されたい。弥彦神社と関係する伝承型がよく知られているため新潟での民話としては採取ケースが多いのであるが、金沢市内の例を金沢市北西部の犀川河口右岸の地域で日本海に面する港町である金石の「金石町公民館」公式サイト「かないわ」のこちらの「伝承芸能」の冒頭「悪魔払い」に発見した（グーグル・マップ・データではここ。以下同じ）。それによれば（本篇の叙述と一致する重要な箇所の前後に指差し記号を挿入した）、『私たちの住んでいる金石には、古くから「宮の腰」と呼ばれ港町として栄えてきました。港町ゆえに信仰も厚く祭りも盛んでした』。『祭礼の余興や行事が今に伝わってきた伝承芸能は』八月第一『日曜日を含む金・土・日の大野湊神社』（ここ）『の夏祭りに見ることができます』。以下、「悪魔払い」の条。『今からおよそ三百年前の江戸時代、元禄年間に金沢の方々で悪魔払いが大流行した。当時悪魔払いは弥彦送りとか、または弥彦払いと呼ばれていたが、この弥彦払いが訛って「やひこばば」となった』。『悪魔払いは、家に病人が出たり、不幸があったりすると』、（ア）『山伏に頼んで厄払いの祈祷をしてもらった。経文を唱え、錫杖を打ち振って歩く者。踊り手は、白布で頭を包み、柿色の法被にたっつけ袴をはき、一人は背に笈を背負って般若』（イ）『の面を入れ、一人は悪尉』（あくじょう：能面の一つで、強く恐ろしい表情をした尉（老翁）の面。多く老神・怨霊などに用いる）『の面を入れ、付き人の者たちは』（ウ）『弓、鉞』（まさかり）『を持って歩く者、唐櫃をかつぐ者もいる』。（エ）『高足駄を履き、ホラ貝を吹き、太鼓をたたいて行進した。この悪魔払いは、幕末には影をひそめてしまい、祭礼の余興として今に伝わってきた』とあって、小さいが写真もあり、まさしく「丹塗の天狗」の面が確認出来る。鏡花は金沢で、この祭りか、以下で示す市内の神社で、この神事舞いを実際に若き日に見ており、それをここでインスパイアしたと考えて間違いない。**「臨兵闘者云々と九字を切る」**道家思想起源の

呪力を持つとされた九つの漢字を指し、その文字を唱えて呪法を行うことを「九字を切る」という。ウィキペディアの「九字」によれば、『西晋と東晋の葛洪』『が著した』「抱朴子」内篇巻十七「登渉篇」に、『抱朴子が』「入山宜知六甲祕祝　祝曰　臨兵鬥者　皆陣列前行　凡九字　常當密祝之　無所不辟　要道不煩　此之謂也」（「鬥」は音「トウ」で「闘う」の意）と、『入山時に唱えるべき』「六甲祕祝」として「臨兵鬥者皆陣列前行」が『あると言った、と記されており、以後』、『古代中国の道家によって行われた。これが日本に伝えられ、修験道、陰陽道等で主に護身のための呪文として行われた』（数種がある。リンク先を参照）。『この文句を唱えながら、手で印を結ぶか』、若しくは、『指を剣になぞらえて空中に線を描くことで、災いから身を守ると信じられてきた』。但し、「抱朴子」の中では、『手印や四縦五横に切るといった所作は見られないため、所作自体は後世の付加物であるとされる』とある。鏡花の言った「臨兵闘者」で始まるそれは、リンク先では「臨兵闘者皆陣列前行」・「臨兵闘者皆陣列在前」・「臨兵闘者皆陣烈（或いは「裂」）在前」・「臨兵闘者皆陳列在前」の四種が挙げられてある。**「希有」**の「けぶ」のルビは誤りではない。「稀有」の「けう」が変化した語で意味は特化して「不思議なさま・奇妙なさま」の意で、近世に既に出現している。」

然も些と來やうが遲い。渠等は社の拔裏の、くらがり坂とて、穴のやうな中を拔けて弗と此處へ顯れたが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風に繞らした、翠帳紅閨の衢がある。おなじ時に祭だから、宵から、其の軒、格子先を練廻つて、こゝに時おくれたのであらう。が、あれ、何處ともなく瀨の音して、雨雲の一際黑く、大なる蜘味の浸んだやうな、峰の天狗松の常燈明の一つ灯が、地獄の一つ星の如く見ゆるにつけても、何うやら三體の通魔めく。［やぶちゃん注：**「くらがり坂」**ここで初めて本ロケーションのモデルが現在の金沢市街地であることが確定される。これは現存する坂名で、いちがみトモロヲ氏のサイト「金沢の坂道」のこちらに、『久保市乙剣宮』（くぼいちおとつるぎぐう）『より主計町』（かずえまち）『に通じる小路を指し、日中も日の当たらない暗い坂道なので、この名で呼ばれている。暗闇坂ともいう。』とある。ここであるが、その地図を拡大すると、この「くらがり坂」の南は久保市乙剣宮神社及び末社の稲荷神社の境内に背後から直に繋がっており、稲荷神社の真後ろが、まさに「くらがり坂」であることが判る（少し引いた航空写真も添えておく）。さらに、この「主計町」は、現在、知られる茶屋街であるが、浅野川大橋を挟んで浅野川の対岸の「東山ひがし」の「ひがし茶屋街」が江戸時代から茶屋街として知られていた。ところが、鏡花は、「坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風に繞らした、翠帳紅閨の衢がある」として、「くらがり坂」下ったそこにあるべき「主計町茶屋街」を全く言わずに、対岸の「ひがし茶屋街」を言っていることが着目されるのである。調べてみたところ、思わず膝を打った。実は、古くからの「ひがし茶屋街」の前身である「東の廓」が、明治時代に入って拡大した需要を受け入れられず、満杯になってし

まったために、新たな旦那衆の遊びの場として形成されたのが、この「主計町茶屋街」であったのである。とすれば、話柄内時制は「主計町茶屋街」が存在していないことを示唆し、本篇の話柄内時制の基本設定は江戸末期と断定し得ると言えるのである。但し、そこに明治初期の雰囲気（先に注した花火の件や、決定打は最終章「八」で、李さんの直接話法の台詞の中に「紅玉」「緑玉」「金剛石」などと言う言葉（ルビの方）が出るのである）が混入するのを、鏡花は恐らく意図的に制限しようとはしなかったのではないかと思われる。それは、正確な時制設定をして、細部まで時代考証をしてしまうと、過去ではあるものの、ついこないだのリアルな時代劇の一部であると読者に受けとられてしまい、幻想の侵犯する余地、というか、その浸食の勢いや幻妖性が、著しく減衰されてしまうからであろうと私は推理する。なお、そうなると、李さんの言う「さと」「實家」という天狗道の異界に通ずる彼らの根城は、「ひがし茶屋街」の東北直近の卯辰山或いはその南東の奥卯辰、さらにはそのさらに南東奥の医王山（グーグル・マップ・データ航空写真）と見た。

渠等は、すつと來て通り際に、從七位の神官の姿を見て、默つて、言ひ合せたやうに、音の無い草鞋を留めた。

此の行燈で、巣に搦んだいろいろの蟲は、空蟬の其の羅の柳條目も見えた。灯に蛾よりも鮮明である。

但し異形な山伏の、天狗、般若、狐も見えた。が、一際色は、李若の鼻の尖で、

「えら美しい衣服ぢやろがな。」

と蠢かいて言つた處は、青竹二本に渡したにつけても、魔道に於ける七夕の貸小袖と云ふ趣である。

從七位の攝理の太夫は、黑痘痕の皺を歪めて、苦笑ひして、

「白癡が。今にはじめぬ事ことぢやが、先づ此れが衣類ともせい……何處の棒杭が此を着るよ。餘りの事ゆゑ尋ねるが、おのれとても、氏子の一人ぢや、恁う訊くのも、氏神様の、」

と嚴に袖に笏を立てゝ、

「恐多いが、思召ぢやと然う思へ。誰が、着るよ、此の白癡、蜘蛛の巣を。」

「綺麗な喃、若い婦人ぢやい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人は、お姫様ぢやろがい、其のお姫様が着さつしやるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものが何處に居る？」
と從七位は又苦い顔。

七

杢若は筵の上から、古綿を啣へたやうな唇を仰向けに反らして、
「あんな事を言つて、從七位様、天井や縁の下にお姫様が居るものかよ。」
馬鹿にしないもんだ、と抵抗面は可かつたが、
「解つた事を、草の中に居るでないかね……」
果然、言ふ事が此である。
「然うぢやらう、草の中で無うて、そんなものが居るものか。あゝ、何んと云ふ、どんな蟲ぢやい。」
「あれ、蟲だとよう、從七位様、えらい博識な神主様がよ。お姫様は茸だものをや。……蟲だとよう、あはゝ、あはゝ。」と、火食せぬ奴の齒の白さ、べろんと舌の赤い事。
「茸だと……これ、白癡。聞くものはないが、餘り不便ぢや。氏神様さまのお尋ねだと思へ。茸が婦人か、おのれの目には。」
「紅茸と言ふだあね、薄紅うて、白うて、美しい綺麗な婦人よ。あれ、知らつしやんねえがな、此位な事をや。」［やぶちゃん注：**「紅茸」**菌界担子菌門菌蕈（ハラタケ）亜門ハラタケ綱ベニタケ目ベニタケ科ベニタケ属 *Russula* に属する非常に多いベニタケ類の総称。グーグル画像検索「ベニダケ *Russula*」をリンクさせておく。ウィキペディアの「ベニタケ」によれば、『きのこの大きさは大小さまざまで、』傘径五ミリメートル程度で全体の高さも一センチメートル『程度の小形種から』傘径が二十センチメートルにも『達する大形のものまで知られている。ほぼ共通して、成熟すると』、傘の『中央部が大きく』凹むか、『漏斗状に反転する』。傘の『色調も多種多様で、紅色系のものが多いのはもちろんであるが、そのほかに白・黒・暗褐色・黄褐色・黄色・橙色・桃色・紫色・緑色などを呈する種が知られ、一つの種の中でも』、『さまざまな変異が見られる。あるいは、一個』体の傘であっても、『部分的に異なる色調が混ざって認められることも珍しくない』。襞の『密度や、その色調も種によってさまざまで、種レベルの同定において重要な手掛かりとされる。肉の色は、多くのものでは白色であるが、傷つけると』、『変色する種が多数あり、その変色パターンも同定の所見として重視されている』。また、『しばしば』、種や個体によっては『強い辛味

や苦味を持つことがある』。『柄は白色系のものが多いが、時に黄色を帯びるものもあり、部分的にピンク色を呈することもしばしばある。ほとんどのものでは』、鍔や壺を『欠いており、柄の内部は海綿状に細かい隙間を生じたり、あるいは完全に中空であることも多い』。『胞子は広楕円形』乃至は『類球形で、多くはその表面に微細な網目状隆起やとげ状突起などの紋様を備えている。これらの紋様は、ヨウ素を含む溶液によって青黒く染まる。なお、胞子紋の色調は白色』乃至は『クリーム色あるいは黄色を呈するものが大半で』ある。『特に夏から秋にかけて、林内の地上に生える。樹木の生きた細根の細胞間隙に菌糸を侵入させ、外生菌根と呼ばれる共生体を形成する』。『外生菌根を形成する相手となる樹種は、日本を含む北半球温帯以北ではマツ科やブナ科あるいはカバノキ科およびヤナギ科が主である』。『上記のような生活様式を持つことから、生育には樹木の生きた細根が必要』絶対条件で、『枯れ木上や獣糞上などに発生する種は知られていない』。『外生菌根を形成する樹木が分布している地域であれば、熱帯から極地にまで産する』。但し、『種ごとの分布域はおおよそ決まっており、全世界に共通して分布する種はむしろ少ない』。『毒々しい色調のために、古くは毒きのこの代表格のように扱われてきていたが、すべてが有毒であるわけではない』。但し、『辛味や苦味が強いものが含まれ、そうでないものも一般に歯切れが悪いために、食用きのことして広く利用されるものは少ない』。『ニセクロハツ』（ベニタケ属クロハツ節ニセクロハツ *Russula subnigricans*。学名グーグル画像検索をリンクしておく）『は致命的な有毒種として知られている。ほかにもいくつかの有毒種が含まれているといわれているが、どの種が食用となり、どの種が有毒なのかについては、不明な点も多い』とある。リンク先にはベニダケ属の本邦産六十六種のリストが挙がっている。」

従七位は、白癡の毒氣を避けるが如く、笏を廻まはして、二つ三つ這奴の鼻の尖を拂ひながら、

「ふん、で、其の、おのれが婦は、蜘蛛の巣を被つて草原に寢て居るぢやな。」

「寢る時は裸體だよ。」

「む、茸はな。」

「起きとつても裸體だになう。――

粧飾す時に、薄らと裸體に卷く寶ものゝ美しい衣服のだよ。此は……」

「うむ、天の惠は洪大ぢや。茸にもさて、被るものをお授けなさるぢやな。」

「違ふよ。――お姫様の、めしものを持て――侍女が然う言ふだよ。」

「何ぢや、侍女とは。」

「矢張り、はあ、眞白な膚に薄紅のさした紅茸だあね。おなじものでも位が違ふだ。人間

に、神主様も飴屋もあると同一でな。……從七位様は何も知らつしやらねえ。あはゝ、松茸なんぞは正七位の御前様だ。錦の褥で、のほんとして、お姫様を視めて居るだ。」

「默れ！　白癡！……と、此様ものぢや。」［やぶちゃん注：リーダ以下は小声の「こげな脳足りんの奴じやから仕方ない」というモノローグ。］

と從七位は、山伏どもを、じろじろと横目に掛けつゝ、過言を叱する威を示して、

「で、で、其の衣服は何うぢやい。」

「はゝん――姫様のおめしもの持て――侍女が然う言ふと、黑い所へ、黄色と紅條の縞を持つた女郎蜘蛛の肥えた奴が、兩手で、へい、此の金銀珠玉だや、其を、其の織込んだ、透通る錦を捧げて、赤棟蛇と言ふだね、燃える炎のやうな蛇の鱗へ、馬乘りに乘つて、谷底から駈けて來ると、蜘蛛も光れば蛇も光る。」

と物語る。君が所謂實家の話柄とて、喋舌る杢若の目が光かる。と、黑痘痕の眼も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇の眼玉も赫と成る。

「まだ足りないで、燈を――燈を、と細い聲して言ふと、土からも湧けば、大木の幹にも傳はる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭だ、俺が實家は祭禮の蒼い萬燈、紫色の揃ひの提灯、さいかち茨の赤い山車だ。」［やぶちゃん注：「さいかち茨」単子葉植物綱ユリ目サルトリイバラ科シオデ属サルトリイバラ *Smilax china* の異名。「猿捕り茨」で蔓性植物で、蔓に生じる棘は鈎状を成して鋭く、「山で恐いは猿捕り茨、里で恐いは人の口」という俗言もある。黄葉する秋に実が赤く熟す。］

と言ふ……葉ながら散つた、山葡萄と山茱萸の夜露が化けた風情にも、深山の狀が思はるゝ。

「何時でも俺は、氣の向いた時、勝手にふらりと實家へ行くだが、今度は山から迎ひが來たよ。祭禮に就いてだ。此の間、宵に大雨のどツとと降つた夜さり、あの用心池の水溜の所を通ると、掃溜の前に、圓い笠を着た黑いものが蹲踞んで居たがね、俺を見ると、ぬうと立つて、すぽんすぽんと歩行き出して、雲の底に月のある、どしや降りの中でな、時々、のほん、と立停つては俺が方をふり向いて見い見いするだ。頭からずぼりと黑い奴で、顔は分んねえだが、此方を呼びさうにするから、其後へついて行くと、石の鳥居から曲つて入つて、此方へ來ると見えなく成つた――

俺あ家へ入らうと思ふと、向うの百日紅の樹の下に立つて居る……」

指した方を、從七位が見返つた時、もう其處に、宮奴の影はなかつた。

御手洗の音も途絶えて、時雨のやうな川瀬が響く。……［やぶちゃん注：「夜さり」懐かしい言葉だ。北陸地方には古語が今も生きている。「夜去り」で「去り」は「来る・近づく」の意を表わす動詞「去る」の連用形が名詞化したもので、「夜になる頃・夜」の意。「ようさり」とも言う。「源氏物語」に既にある中古以来の古語である。この章の終りの台詞とカメラ・ワークはまっこと絶妙である。］

八

「其のまんま消えたがなう。お社の柵の横手を、坂の方へ行つたらしいで、後へ、すたすた。坂の下口で氣が附くと、驚かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺びた、いぼいぼのある蒼い顔を出して笑つた。――山は御祭禮で、お迎ひだ――とよう。……此奴はよ、大でかい蕈で、釣鐘蕈と言うて、叩くとガーンと音のする、甲羅經た親仁よ。……巫山戯た爺が、驚かしやがつて、頭をコンとお見舞申さうと思つたりや、もう、すつこ抜けて、坂の中途の樫の木の下に雨宿りと澄ましてけつかる。

川端へ着くと、薄らと月が出たよ。大川はいつもより幅が廣い、霧で茫として海見たやうだ。流の上の眞中へな、小船が一艘。――先刻こゝで木の實を賣つて居つた婦のやうな、丸い笠きた、白い女が二人乘つて、川下から流を逆に泳いで通る、漕ぐぢやねえ。底蛇と言うて、川に居る蛇が船に乘ツけて底を渡るだもの。船頭なんか、要るものかい、はゝん。」［やぶちゃん注：**「釣鐘蕈」**菌蕈綱ヒダナシタケ目サルノコシカケ科ツリガネタケ属 *Fomes fomentarius*。多年生。大小二つの型があり、大型のものは、丸山形で、傘径二十～五十センチメートル、厚さは十～二十センチメートル。小型のものは、釣鐘形で、径三～五センチメートルほどのものが多い。両型とも傘の上面は、厚くて、硬い殻で覆われ、表面は灰色乃至は灰黄褐色を呈する。同心円状に並ぶ輪紋と溝があり、傘の下側は灰白色で、細い管孔が密に並ぶ。縦断すると、黒い殻の下に黄褐色でフェルト質の肉があり、その下に管孔の層が幾重にも重なっている。各層は一年毎の成長を表わし、各層の厚さは〇・五～二センチメートル。胞子は無色。北半球温帯に分布する。無毒。（小学館「日本大百科全書」に拠った）。グーグル画像検索「*Fomes fomentarius*」をリンクさせておく。］

と高慢な笑ひ方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺を負つて、ざぶざぶと流を渡つて、船に乘つ

た。二人の婦人は、柴に附着けて賣られたつけ、毒だ言うて川下へ流されたのが遁げて來たゞね。

ずつと川上に行くと、其處等は濁らぬ。山奥の方は明い月だ。眞蒼な激い流が、白く颯と分れると、大な蛇が迎ひに來た、でないと船が、もう其の上は小蛇の力で動かんでな。底を背負つて、一廻りまはつて、船首へ、鎌首を擡げて泳ぐ、龍頭の船と言ふだとよ。俺は殿様だ。……

大巖の岸へ着くと、其の鎌首で、親仁の頭をドンと敲いて、（お先へ。）だつてよ、べろりと赤い舌を出して笑つて谷へ隠れた。山路はぞろぞろと皆、お祭禮の茸だね。坊主様も尼様も交つてよ、尼は大勢、びしよびしよびしよびしよと濕つた所を、坊主様は、すたすたすたすた乾いた土を行く。濕地茸、木茸、針茸、革茸、羊肚茸、白茸、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵の上を膝で刻んで、嬉しさうに、ニヤニヤして、

「初茸なんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣へて居るだよ。……さあ、お姫様の踊がはじまる。」

と、首を横に掉つて手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍女は千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗つちや、ぞろぞろぞろぞろ皆な衣裳を持つて來ると、すつと卷いて、袖を開く。裾を浮かすと、紅玉に乳が透き、緑玉に股が映る、金剛石に肩が輝く。薄紅い影、青い隈取、水晶のやうな可愛い目、珊瑚の玉は唇よ。揃つて、すつ、はらりと、すつ、袖をば、裳をば、碧に靡かし、紫に颯と捌く、薄紅を飜す。

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン、おひやら、ひゆうい、チテン、テン、ひやあらひやあら、トテン、テン。」［やぶちゃん注：**「底蛇」**以下のそれは鏡花の創作伝承と思われるが、杢さんに語らせると、本当に見えてきて、なかなかにそそるものがある。**「針茸」**狭義には菌蕈綱ヒダナシタケ目ヒダナシタケ目ハリタケ科 Hydnaceae に属するキノコ類の総称。菌類の分類学上はハリタケ属 *Hydnum* 及びニクハリタケ属 *Steccherinum* などに跨っている。柄の発達したものもあるが、側生が普通で、傘の裏には長い歯のような突起が密生しており、子実層は、この突起の面に生ずる。枯れた材や、切り株に生じ、木質或いは革質の他、地上に生えて肉質で軟らかい種などがあり、前者にはカノシタ（食用）・イタチハリタケなどが、後者にはニクハリタケ・

マンネンハリタケなどがある。グーグル画像検索「ハリタケ科 Hydnaceae」をリンクさせておく。**「革茸（かうたけ）」**現代仮名遣「こうたけ」。「皮茸」「茅蕈」「香茸」と書き、シシタケ（鹿茸）とも呼ぶ。コウタケ科（或いはイボタケ科）コウタケ属コウタケ *Sarcodon aspratus*。各地の広葉樹林下に群生し、高さ十〜二十センチメートルで、傘は中央が凹んだ傘径五〜十五センチメートルの漏斗形で、暗褐色を帯び、表面には粗い鱗片、裏面には針状で褐紫色の突起がある。柄は太く、下部まで中空。乾燥すると、黒色に変じる。美味で、香りもよく、精進料理などに用いられる。「森林総合研究所」公式サイト内の同種にページが非常に詳しい。そこに『独特の香りがあり、きのこ狩りの人達には垂涎のきのこですが、マツタケほどは知られていません』。『生で食べると中毒するので、通常は、よく乾燥させてから水で戻し、十分加熱してから調理します。炊き込みご飯やお吸い物、ちらし寿司の具にもなります』とあり、『コウタケは日本では古くから知られ』「徒然草」『にも「鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず、小さき虫ありて、鼻より入りて、脳を食むと言へり」との記述があり、江戸時代には乾燥品が売られていました。「和歌食物本草」』（著者不詳。寛永七（一六三〇）年刊）『には、「革茸のなまなは諸病の毒なれど ほしたるはまた少し用いる」と記され、既にその食毒についての知識がありました』とある。但し、この「徒然草」のそれは第百四十九段であるが、これ、所持する諸注釈本を見ても、『鹿（しか）の茸（つの）』或いは『鹿茸（ろくじょう）』とし、孰れも、これは李時珍の「本草綱目」に由来する記載とされ、夏に鹿の角が落ちて、新しく出来る「袋角（ふくろづの）」のこととする（乾燥させたそれを強壮剤その他に薬用に供した）ので、ちょっと違う。また、小学館「日本国語大辞典」には『日本特産』とあったが、調べえ見るに、同学名で東アジアで広く食用とされるとあり、中国産の同種も確認出来たので、これも誤りである。なお、本篇の舞台は金沢であるから、「石川県」公式サイト内の「いしかわきのこ図鑑」の同種のページも見つけたのでリンクさせておく。**「羊肚茸（ゐぐち）」**これは食用キノコとして特に海外で知られる子嚢菌門チャワンタケ亜門チャワンタケ綱チャワンタケ亜綱チャワンタケ目アミガサタケ科アミガサタケ属アミガサタケ *Morchella esculenta* の漢名異名である。現代中国語でも「羊肚菌」（ヤンドゥージュン）と表記する。頭部と茎の二部からなり、高さ五〜八センチメートル。頭部は淡い汚土色で、不規則な形の籠目（かごめ）状の凹みがあり、肉質は脆く、内部は空洞である。茎は、やや下膨れの円柱状を成す。子嚢は円筒形で、頭部の凹みの内面に形成され、その中に八個の無色で楕円形の胞子を一列に収める。春のきのこで、四月頃、雑木林の地上や庭の木の下などの草に混じって生ずる。分布は世界的で、本邦では食用にする習慣はないが、欧米、特にフランスでは「モリーユ」（morille）の名で親しまれ、第一級の食用きのことしてフランス料理で珍重される。グーグル画像検索「*Morchella esculenta*」をリンクさせておく。**「白茸（しろたけ）」**これは種同定は出来ない。真っ先に思い浮かべてしまうのは、真っ白のスマートな、欧米では「死の天使」の異名を持つ猛毒の菌蕈綱ハラタケ目テングタケ科テングタケ属ドクツルタケ *Amanita virosa* であったが（学名グーグル画像検索）、食用となるものの中毒するケースもあるシロシメジ *Tricholoma japonicum*（同前）など、「白いきのこ」

は多く、致死的猛毒を持つものから、食用としてレアで甚だ美味なものまで幅が広く、形状も多様である。やはりおいそれとは手を出したくない部類のきのこである。本篇の雰囲気からは、毒性の高い、山中にぼうっと立つ白衣の死神っぽい印象のきのこが似合いそうだ（実際に顧問をしていたWV部や山岳部の山行中、何度も見かけたが、なかなか慄っとするものであった。なお、以上の注は、ヴィジュアルな形状と、毒性の有無を中心に複数の辞書類と信頼出来る記載を比較して記した。注しなかったものは私が食したことがあり、形状を想起し得るからに過ぎない。悪しからず。」

廓のしらべか、松風か、ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン。あらず、天狗の囃子であらう、杢若の聲を遙に呼交す。

「唄は、やしこばゞの唄なんだよ、ひゆうらひゆうら、ツテン、テン、

やしこばゞ、うばゞ、
うば、うば、うばゞ、
火ひを一つくれや……」

と、唄ふに連れて、囃子に連れて、少しづつ手足の科した、三個の這個山伏が、腰を入れ、肩を撓め、首を振つて、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなものである。

從七位が、首を廻いて、笏を振つて、臀を廻いた。

二本の幟はたはたと飜り、虚空を落す天狗風。

蜘蛛の圍の蟲晃々と輝いて、鏘然、珠玉の響あり。

「幾干金ですか。」

般若の山伏が恁う聞いた。其の聲の艶に媚かしいのを、神官は怪しんだが、やがて三人とも假裝を脱いで、裸にして縷無き雪の膚を顯すのを見ると、いづれも、……血色うつくしき、肌理細かなる婦人である。

「錢ではないよ、皆な裸に成れば一反づゝ遣る。」

價を問はれた時、杢若が蜘蛛の巣を指して、然う言つたからであつた。

裸體に、被いて、大旗の下を行く三人の姿は、神官の目に、實に、紅玉、綠玉、金剛石、眞珠、珊瑚を星の如く鏤めた羅綾の如く見えたのである。

神官は高足駄で、よろよろと成つて、鳥居を入ると、住居へ行かず、階をあがつて拜殿に入つた。が、額の下の高麗べりの疊の隅に、人形のやうに成つて坐睡りをして居た、

十四に成る緋の袴の巫女を、いきなり、引立てて、袴を脱がせ、衣を剝いだ。……此の巫女は、當年初に仕へたので、恁うされるのが掟だと思つて自由に成つたさうである。

宮奴が仰天した、馬顔の、痩せた、貧相な中年もので、豫て吶であつた。

「從、從、從、從、從七位、七位様、何、何、何、何事！」

笏で、びしやりと胸を打つて、

「退りをらうぞ。」

で、蟲の死んだ蜘蛛の巣を、巫女の頭に翳したのである。

嘗て、山神の社に奉行した時、丑の時參詣を谷へ蹴込んだり、と告つた、大權威の攝理太夫は、これから發狂した。

――既に、廓の藝妓三人が、あるまじき、其の夜、其の怪しき假裝をして内證で練つた、と云ふのが、尋常ではない。

十日を措かず、町内の娘が一人、白晝、素裸に成つて格子から拔て出た。門から手招きする杢若の、あの、寶玉の錦が欲しいのであつた。餘りの事に、これは親さへ組留められず、あれあれと追ふ間に、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮が散るやうに、幾人となく女が舞込む。

――夜、其の小屋を見ると、おなじやうな姿が、白い陽炎の如く、杢若の鼻を取卷いて居るのであつた。

［やぶちゃん注：以上で本篇は終わっている。

「高麗べりの疊」は「高麗縁」「高麗端」で畳の縁の一種で、古くより貴族が用いた高麗錦の縁模様を指す。平安以来、白地に黒の花文（けもん／はなもん）、或いは、襷に花文の綾を用い、近世は綾に倣った麻の染文とし、花文の大小によって、「大文高麗」と「小文高麗」と区別し、公卿や殿上人によってその用いる物が違った。

最後に。私は冒頭から登場する、本篇に於いてコーダまで重要なアイテムとして機能する、蜘蛛の巣の羅が、何とも言えず妖しく魅力的で仕方がないのだが、今回、久々に読んでみたところでは、途中から、あるきのこが、鏡花のイメージの中にあるのではないか？　という思いが絡みついて離れなかった。それは、白いレースのような菌網

（indusium）と呼ばれる附属器官が短時間に姿を見せて胞子散布をする菌網真正担子菌綱スッポンタケ目スッポンタケ科キヌガサタケ属キヌガサタケ *Phallus indusiatus* である（学名グーグル画像検索）。私は二十年程前、嵯峨野の嵐山竹林を妻とともに歩いている最中、偶然に見かけた。鏡花がこの衣笠茸を知っていたかどうかは判らない。しかし、若し、鏡花先生に逢えて、このきのこを私が示したら、恐らく先生は静かに黙って微笑んで呉れると私は思っている。」